

# カフェ・マロツキーノ

遠方の地から来て、この宮に来て祈るとき、あなたご自身があなたの御住まいの所である天でこれを聞き、その外国人があなたに向かつて願うことをすべてかなえてください。

(旧約聖書・列王記8章41―43節)

# 目次

一	ソフィア
ロ	ダビデ
目	母からの手紙
ㄩ	父
△	マリア
ㄩ	ヨシキ
ㄩ	ジョバンニ
ㄩ	フランチェスカ
ㄩ	シンジ
ㄩ	東方
ㄩ	外国人

ソフィア、マリア、ダビデの3人を乗せた四輪車はミラノ市内を走行し、後部座席に座っているソフィアは窓ガラス越しに映るミラノの街を眺めている。長年憧れていたミラノの街が目の前に存在し、自分がそこにいるのだという興奮もあつて目に映るものは輝いて見える。

漆喰壁、レンガ造りの住居が立ち並び、背の高いプラタナス、マロニエの木々が道路に沿って植えられ、その間をレトロなトラムが走り抜けていく。所々に空に聳え立つ近代的なビルが見え、市内は石畳の街並みを想像していたが、道路のほとんどはアスファルトのようだ。

イタリアの太陽の光は変わらず力強く、アスファルトの上にはぼんやりとした陽炎が泳いでいる。買い物かごを引きずりながら歩くおばさんがいて、ヘッドフォンをした金髪の若い女性、十代と思われる若者のグループもいる。車の列は少しずつ込み始め、その間を縫うようにオートバイが唸りを響かせて道路わきを走り抜けていく。

いつの日かミラノに行ったら忘れていた自分の記憶が蘇るかもしれない、長年そう思っていたソフィアだが、記憶の蓋は閉じたまま今のところ思い出せる風景はない。それでもソフィアはまるで夢の中にいるように、自分がミラノの街に含まれていることを嬉しく思う。マリアは何か考えことをしているように黙ったままハンドルを握っている。

「あれ、すごい！なんの建物」とソフィアは感嘆の声を挙げる。

「あれはミラノの中央駅だよ」とダビデが答える。「第一次大戦ごろ、ムッソリーニが命じて再建したからファシスト建築なんて言われるけど、結構最近の建築物なんだ。好き嫌いはあるけどイタリアの中でも一番立派な駅と言えるだろうね」

白く輝いた中央駅には様々な装飾が施されおり、最上部にユニコーンの像が並んで聳えている。二対のユニコーンは翼を広げ、駅の前にある開けた広場を見下ろしている。ユニコーンは大空を飛び回りたいが、何か神話的な力によってそこにいる運命を虐げられているように思える。広場の中心にはリングの形をした灰色のオブジェが置かれ、脇の方で段差を利用してスケボーをしている青年達がおり、木の木陰でたむろしている黒人グループの姿が見える。

中央駅の近辺にはマクドナルドやピザ屋、ホテルの看板などが目に付き、路地を曲がったところで道路わきにマリアは車を停め「ここじゃない、ホテル？」と言う。

6階建てほどの灰色の外壁をしたその建物からソフィアが予約していたホテルの看板が突き出ている。周りの建物もほぼ同じ高さ、同じ雰囲気なので看板がなければわからなかっただろう。

「ここ？もう着いたのね。思ったよりも早かったわ。送ってもらってありがとう。どうしよう？お札にガソリン代でも払おうかしら？」

「そんなことはいいの、それよりこの後はどうするの？ダビデは家に帰りたい？私は時間があるから、カフェか、食事でもする？」とマリアが聞く。

「ダビデも長旅で疲れているだろうから休みたいんじゃない？」

「僕は大丈夫、とりあえず荷物を運んでチェックインすればいいんじゃない」

ダビデは車のトランクからソフィアのスーツケースを取り出してくれ、ソフィアと一緒にホテルに向かう。エアコンの利いていた車内とは違って外の空気はむっとする夏の暑さで満ちている。ホテルの玄関にはホテル名の入った庇の下に簡素な観葉植物が置いてあった。豪華というわけではなく、ビジネスホテルといった佇まいだ。

白を基調とした明るいエントランスを抜けると右側に木製の受付のカウンターがあり、スーツ姿の中年の男性が笑みを浮かべて迎えてくれる。コンソルジュの男性は紺色のスーツにチェック柄の赤いネクタイを締め、豊かな白いあご髭を生やしている。

コンソルジュは「ミラノへようこそ、ご予約はされていますか？」と英語で言う。

「ソフィア・クリスティアーノです」とソフィアはイタリア語で答える。

「オー、イタリア語ができるんですね、それではパスポートをお願いします。お二人ですか？」男性はダビデを見てそう言う。

「違うんだ、泊るのは彼女だけ」慌ててダビデはそう答える。

「かしこまりました」男性はパスポートとホテル予約の紙を受け取るとパソコンを操作し、予約の確認をする。身のこなしに隙がなく、それでいて信頼感の持てる落ち着いた雰囲気だとソフィアは思う。

「ソフィア・クリスティアーノ様、今日から3泊のご予約ですね。まだお部屋の準備ができておりませんので、チェックインは12時から、朝食は6時半から10時半まで、エントランス奥のホールで用意しております。宜しければお荷物お預かりいたします」

ソフィアは壁にかかった時計に目をやると10時10分を差している。チェックインまではまだしばらく間があるようだ。

「そっか、まだチェックインできないんだ」ダビデはそう言ってスーツケースをコンソルジュに渡す。「それじゃあどこかでカフェでもする？ソフィア、お腹空いてる？」

「でも、いいのかしら。ダビデも疲れているんじゃない？」

「僕は大丈夫だよ、マンマも誘ってたしさ。マンマが初対面の人に打ち解けるなんて珍しいんだよ。チェックインまでどこかお店に行こうよ」

ダビデとマリアに気を許してはいたが、このまま食事に行くのはどうだろうとソフィアは迷う。しかしホテルにチェックインできない以上、見知らぬ土地でひとり時間を潰すには少し不安がある。

「そうね、それならもう少しだけいいかしら？」とソフィアは答える。

ダビデがコンソルジュの男性に時間を潰してくることを告げ、ダビデと一緒にマリアが車を停めているところまで戻り、ダビデはBMWの窓をノックする。

スマートフォンを操作していたマリアは車の窓を開けながら「どうするの？」と聞く。

「まだソフィアがホテルにチェックインできないんだ。どこかお店に行こうよ」

「あらそう、でもまだレストランは開いている時間じゃないわよね、どこかのバーにしませう」

「私はどちらでもいいわ。二人が決めてくれれば」

「じゃあ、近くのボールに行こう」とダビデが言う。「マンマ、久しぶりのイタリアンエスプレッソだ」ダビデは嬉しそうに口を綻ばせてそう言う。

「じゃあ、近くだから歩いていきましょ。駐車する場所がないかもしれないし」

3人はホテルの前に車を置いてボールに向かい、マリアが先導して先を歩き始め、ソフィアはダビデとマリアの後ろを並んで付いていく。マリアは歩きながらスマートフォンを操作している。

「どうしたの？大丈夫、ソフィア」とダビデは聞く。

「うん、大丈夫、ありがとう」ソフィアはそう答える。

道路わきにはオートバイ、車が隙間なく縦列駐車してある。この隙間のない車はどうやって発進するのだろうかと思議に思う。先頭のマリアが歩いていく方向についていくと広場があり、手前の角に小さな教会がある。教会の前では中年のおばさんが手を差し伸べて通行人に向かって何か呟いている。擦り切れたティシャツに、短パン、白髪の混じった髪は荒れ放題という形相だ。「お願い、助けて」とソフィアにも手を差し伸べてくる。マリアはそのおばさんの横を通り抜け、ダビデも見なかったようなふりをして通り抜ける。あれは物乞いなんだとソフィアは思う。

教会を通り過ぎると広場に面してボールがある。赤い庇の下にはテーブルがいくつか出されており、眼鏡をかけて新聞を読んでいる年配の男性、女性の二人組、まだ朝の時間と呼んでもいいのに白ワインを囲んでいる3人組のビジネスマン風のグループもいる。

「ここでもいいかしら？」と先導していたマリアは4人席テーブルに進んで腰を下ろす。テーブルの上にはベージュのテーブルクロスが敷かれており、灰皿とメニューが置いてある。ソフィアはマリアと向かい合い、ダビデと並んで座る。

「僕はエスプレッソ、ソフィアは何にする？」

「私は、カプチーノにするわ。機内食を食べたからまだそれほどお腹は空いていなし」

「そう、じゃあ私はマロッキーノにしようかしら」とマリアが言う。

「そのマロッキーノって何ですか？コーヒーの種類？」

「マロッキーノっていうのはカプチーノよりもミルクが少なめのコーヒーなんだ。カプチーノはミルクが多いから朝飲むことが多いけど、モロッキーノはマキアートとカプチーノの間ぐらいのミルクが入ってるね」

「マキアート？」

「マキアートっていうのはエスプレッソコーヒーに少しだけミルクが入っているもの。ミルクも泡立っているもの、温めたもの、冷たいもの、言えばいろいろとやってくれるんだ。イタリアはコーヒーに関しては何れもそれぞれうるさいからね。日本でもコーヒーは飲んだけど、コーヒーに関してはやっぱりイタリアが一番だね」

ウェイターがテーブルにやってきてダビデはエスプレッソコーヒー、ソフィアは聞いたばかりのマロッキーノを注文する。マリアは私もマロッキーノ、カカオ抜きで、と注文し、

コーヒーひとつに閉しても随分と注文が細かいものだと思ふ。

「ねえ、ソフィア、悪いんだけどさっきの写真をもう一度見せてくれない？」マリアがそう聞くのでソフィアはポストンバッグからタブレットを出し、そこに挟めていた写真をマリアに差し出す。マリアは大事そうに写真を受け取ると眼鏡越しに目を細めながら、じつとそれを眺めはじめた。

「どうしたの、マンマ？」

マリアは食い入るように写真を眺めていたが、その眼はキラキラと輝き始め、やがて嗚咽を發し始める。

「マンマ、どうしたの？」とダビデが心配そうに声をかける。

マリアは眼鏡を外し、両手で顔を覆うようにして泣き始める。ソフィアは急なマリアの変貌ぶりに啞然とし、近くのテーブルに座っていたビジネスマンがマリアに視線を送る。

ホールには夏のイタリアの太陽が照り付け、光を浴びたテーブルにはマリアが外した金色の眼鏡、そしてソフィアが日本で母から最期に貰った手紙に入っていた写真、灰皿とお店のメニューが並んで置かれている。

大きく窪んだ向こう側のプラットフォームは人生が染みついたステージのように見え、そのステージにはソフィアのそれまでの人生が刻まれている。駅という可能性、出発点と到着点。ソフィアは過去というステージを目の前にして、それを反対側から眺めている。

東京都葛飾区青砥駅、熱帯夜の地下鉄構内。そこには扇子をパタパタさせて白いワイシャツを汗で濡らした中年のサラリーマンや、首を曲げて携帯とにらめっこしている若い女の子、黒い服に身を包んで唇を固く結んだ我慢強そうなおばさん達がいる。今夜はとりわけ蒸し暑く、冷めきれない蝉の音が遠くまで響いているように感じる。

ざっくりと首元と肩が見える、白のワンピースを着たソフィアは人々の頭の上にぶら下がった電光掲示板を見る。首元が綺麗に見えるほどにカットされた髪は、馬のような栗色で、ゆるいウェーブがかかっている。丈が長めのそのワンピースから付き出る素足の先には黒い踵のないパンプスを履いている。デジタル文字で浮かび上がった「成田空港行き」8:56と表示してあるのが待っている電車だ。

ソフィアは荷物を確認するようにスーツケースから飛び出した黒いプラスチックの取っ手の部分に触れる。若い女性にしては装飾品も身につけず、化粧はまったくしてないが、その掘の深い顔立ちは遠くからでも浮きあがって見える。

街を彩るネオンに包まれる構内に待ち望んでいた鐘の音がなるように「2番線に入ります電車は、空港アクセス線成田空港行き・・・」とプラットフォームにアナウンスが流れる。

東京都葛飾区青砥駅、そのアナウンスをソフィアは26年の人生で何百回も、何千回も聞いていた。しかし今はそのアナウンスをいつも利用する東京の中心地へ向かうのとは別のプラットフォームで聞いている。

向こう側のステージにはそれまでの自分の過去の幻影がおぼろげに踊っているように思える。通学、通勤、駅前の商店街、鮮やかにいろんな思い出が蘇り、電車がプラットフォームに入ってくる熱風に煽られて記憶がさらに揺さぶられる。

徐々に電車の頭部が近づいてきて、電車のガラス越しにフラッシュバックのような光の束が目差すように続く。通り過ぎていく電車の中にいる人々は、いつも自分が使う駅なのに見知らぬ人々が乗っているように思える。まるで自分の街を初めて別の角度から見つめたように新鮮に映る。自分が暮らし、自分の街である場所が全く覚えのない、自分の知らない街であるように思えてくる。

そのせいかプラットフォームに入ってくる電車を見ながら、ソフィアは電車に乗る自分が一瞬だけかわからなくなるような錯覚に陥る。いつもの街の匂いと、いつものプラットフォームで電車を待つ人々がいて、そしてソフィアの髪をなびかせる生温かい風がある。

その中でいつも向かう方向とは反対側のプラットフォームの電車に乗ること、それはなんだが日常の向こう側に飛び移ることのように思える。

ソフィアはこちら側のプラットフォームに立っている自分を幼い頃から何度も夢に描いていた。いつも大きなスーツケースを重そうに引きずり、空港行きの電車に吸い込まれていく人々はどこにいくのだろう？もしかしたら、イタリアに行くのかもしれない、と。

電車がプラットフォームに停まり、エアーコンプレッサーの音と共に扉が開く。早く冷房の利いた車内に飛び乗りたい人々の列は半歩だけ前に進み、降りてくる人々をじっと待ちかまえている。

ソフィアは自分の肩から提げている紺色のポストンバッグを一度持ち上げてバランスを整える。この革のポストンバッグは大学卒業後、仕事に出るときに買ったものですでに3年以上は使用していたからいささかくたびれていた。持ち手は擦り切れ、外側に付けられたポケットも色落ちしている。それでも何かひとつぐらいは自分が使い込んだもの、自分の匂いが染みついたものを持ってゆきたいと思っただけでソフィアはこのバッグを持っていくことにした。世界の反対側に行った時に、何かにくじけそうになったときに、そうゆうものがそばにあると安心できるかもしれないと思っただけ。

そしていつも身につけている胸元の十字架のペンダントがそこにあることを確かめるように握り、その感触を、その手触りをもう一度確認する。葛飾区青砥駅の夜空に向かって自分の祈りをもう一度確かめるように。「神様、私の罪をお許し下さい。」そう心の中で祈る。

乗客が降りてしまうと待ちわびた人々の列が電車に乗り込んでいく。それに従ってソフィアの夢も前進する。ソフィアは後ろ手でスーツケースの取っ手を掴み、その荷物を、人生の重みを引きずり始める。真っ赤な新品のスーツケースには衣類や洗面用具、化粧品、パソコンなどの電子機器が入っている。

住み慣れた故郷を離れるにあたってソフィアは最後にもう一度、自分がやり残したことはないかと考える。パスポートも持ったし、銀行で両替したユーロも持った。それらと一緒にプリントアウトした航空券はプラスチックケースにしまっておいたバックに入れている。それでも何かひっかかった。それまでの蓄積した記憶が、自分の体をどこか遠くから引っ張っているような気がする。自分が何か大きなことを見逃しているような気がする。

ソフィアはほんの数週間前まで、まさか自分が今日のこの日、7月7日に出発することになるなんて想像すらしていなかった。正確には今日は7月6日。しかし日を跨いで飛行機が飛び立つ頃には7月7日になっているはずだ。

ついさっき家の玄関口まで見送ってくれたソフィアの弟はシンジという日本向きの名前が付いている。同じイタリア人と日本人のハーフと言っても、4つ年下の弟は日本で生まれ育ち、母親似だったから割に平坦な顔をしている。黒ぶちの眼鏡をかけていることもあるかもしれないけれど、そう言われなければハーフとはわからないかもしれない。外見的特徴の薄い弟のことを中学時代その特徴のせいでよくクラスの生徒からかわれたソ

ファイアは羨ましく思っていた。

別れ際、母を失くした悲しみを分け合える相手のいなくなった弟シンジは寂しそうに手を振った。その後ろには使い慣れた玄関の扉があり、玄関にはしばらく使われる見込みのない女性物の靴がまだいくつも並んでいた。仕事から帰ってきたばかりでスーツ姿の弟は目の下にくつきりとした黒いラインが浮かべ、ここ数日死んだように真っ白な顔をしていた。恰幅の良いお腹のふくらみはここ数か月で少しは小さくなったように見えた。

「向こうに着いたらメールしてね」それが母の葬儀で疲れ切った弟の最後の言葉だった。

電車に乗り込む列の最後部にいたソフィアが重いスーツケースを持ち上げて電車に乗り込むと発車のベルが鳴り、扉が閉まる。そして故郷の余韻を残すような蝉の声もそれと同時に聞こえなくなってしまう。

ソフィアは窓ガラス越しにスライドしていく自分の故郷を眺める。均等に並んだプラットフォームの光はゆっくりと走りだした電車のために段々と斜めになっていく。通勤、通学で何度も上り下りした階段が見え、身覚えるある場所にキオスクの自動販売機が見える。そのガラス越しのステージには幼かった自分の姿や母の面影が見えるような気がする。

ソフィアはスーツケースの取っ手を握りながら、自分が泣きだしそうな感傷に包まれているのがわかった。この日を、この出発の日を長年待ちわびていたはずなのに、ガラス越しの自分の育った街がまるで肉体の一部を切り取られようとしているような悲しみに満ちて見える。

ソフィアは小さい頃から自分の故郷にどことなく違和感を抱き、もしかしたらいつかこんな日が、こうゆう感傷が自分に湧きあがってくるかもしれないと思ってきた。しかしその感情が目の前に現れて見ると、自分がとんでもない罪を犯しているように思えてくる。まるで無責任な偽善者のように、自分だけが秘められた甘い蜜を吸い、他人を貶めているような。

でも、とソフィアは思う。でも、私は私の人生を前に進めなくてはいけない。私はプラットフォームの白線を越え、境界線を越えてすでに空港行きの電車に乗っている。過去は電車の後ろにあり、「今ここ」には現在の私がいる。人生を進めるために、自分に正直になるために、私は踊り続けなくてはいけない。一本の糸のようなガラスの時間を作り続ける、華麗なフィギュアスケートの選手のように。

電車が駅を離れてしまうと東京の街のネオンが遠くに見える闇のガラスの中にはソフィアの顔が映っている。そこには卵のような綺麗なおでこがあり、白眼の部分が多い濡れた漆黒の瞳の上には唯一母から受け継いだ切れ長の眉がそびえ、三角定規のような高い鼻、につこりと笑うと熱帯雨林の花のように広がる薄い唇が見える。

私は泣いているのだ。ガラス越しの自分の目から滴が流れていることに気が付いてソフィアはそう思う。それでも私にとって、これはもうひとつの故郷を見つける旅なのだ。自分の血に正直になるために、一度日本のふるさとを捨ててはいけないのかもしれない。そう考えてソフィアは涙をぬぐい、まだ目の裏に焼き付いている青砥駅のネオンをもう一

度思い返す。

そしてスーツケースの取っ手をもう一度握り直し、そう、これは私が生まれ変わるための巡礼の旅なのだ、と自分に言い聞かせるように祈る。私の生まれた場所、ミラノへ行くということが。

末期がんの母親を半年に渡って自宅で見守っていた間は、その先のことなんて全く考えられなかった。できるだけ病院には入りたくないという母親の要望に応えるため、ソフィアは母親のために仕事を辞め生命の灯を最後まで見届けるように看病に専念していた。いつ消えるかもしれないゆらぐ炎を前にしていると、未来のことも、過去のことも考えられなかった。その日一日一日が母親と過ごす最後の日になるかもしれないという緊張感を含んだまま、ソフィアはその半年を過ごした。

喉頭がんだった母は一度都内の病院で手術をし、放射線などの治療を受けてはみたものの発見したのが遅すぎた。52歳という母親の年齢は平均寿命を考えると早くはあったが、本人は再発したときから覚悟はできていたようだった。

ソフィアが葛飾区青砥の実家で看病をしていたこともあつて母親は亡くなる前の5日間だけ病院に入り、そこで6月28日夕方、初夏の空特有の綺麗に雲全体がオレンジに染まった空の下、人生の最後を締めくくる行為として病院のベッドの上で祈るように結んでいた両手を少しだけ持ち上げ、息を引き取った。閉じられた詩的とも言えるような特徴的な切れ長の目と、それを沿うようにして縁取られた眉は少しだけ歪み、酸素マスクを外した時の薄い唇は色を失いながらもしつかりと閉じられていた。そこには今まで見たこともなかったある種の気品を感じさせる母の顔があった。

1980年代という日本が経済成長の絶頂期にあつた時期、20代の母は留学という目的でミラノに数年住んでいた。その時代にそうゆうことができる家庭的背景のある家に生まれ、その当時はアンカレッジ経由という長い飛行時間を経てミラノに行き、母親はしばらくの間、世界の反対側で暮らしていた。そして奇妙な運命の輪を結ぶようにそこで母親はソフィアの父と出会い、結果ソフィアはこの世に生を受けたことになる。

「ソフィア・クリステイアーノ様でございますね？」

ソフィアがスーツケースをコンベアに載せ、パスポートとチケットを渡すと、ルフトハングザのチェックイン・カウンターに座った日本人のキャビン・アテンダントは事務的な口調でそう言う。

「はい、そうです」とソフィアは答える。

「フランクフルト空港経由、ミラノ・マルペンサ空港行き、で間違いございませんね？」

「はい、そうです」とソフィアは再び答える。

チェックイン・カウンターの女性は黒色の制服を着込み、胸元には小さな黄色のスカーフを身に付けている。ぴっちりとした後ろでまとめられた髪がなんとも礼儀正しく、年齢はソフィアと同じくらい、20代半ばごろに見える。ソフィアはほっそりした彼女を見て、日本人がチェックイン業務をしていることに少し驚く。もしかしたら肩幅の広い、大きなド

イツ人がいるのかもしれないと思っていたからだ。

「失礼ですが、クリスティアノ様は、日本国籍で、今回は3カ月以内のヨーロッパ滞在ということで宜しかったでしょうか？」

「はい、そうです」

「少々お待ちください」そういうと女性は目の前のパソコンに目をやり、キーボードを素早く打ちこみ始める。

成田空港、ターミナル1の発着ロビー。アルミ材を敷き詰めたキラキラとした高い天井が広がり、その下では大勢の人と喧騒でごった返している。大きなスーツケースを重そうに運んでいる者、ベビーカーを引いた家族連れや、律儀に列に並んでいる白人の若者達の姿もある。バカンスシーズンということもあり半そで、ショートパンツという肌を多く露出したラフな格好の人々が多い。ロビーには搭乗しようとする人々の気忙しさと日常を抜け出す時のリラククスした解放感が入り混じって溢れている。空港内でやたらと日本語と英語が並んでいる看板を見てきたソフィアにはすでにこの場所は日本とは違う雰囲気のように思える。青砥駅を出てからはいつも通りの地下鉄の駅があり、郊外の真つ暗な景色が見え、電車はきちんと定刻通りに成田空港ターミナルビルに到着した。ソフィアは出発ロビーを指し、スーツケースを引っ張りながらいくつかのエスカレーターを登ってこの搭乗ロビーまでやってきた。

「お待ちせいました」と目の前のキャビン・アテンダントが言う。「搭乗ゲートは28番、手荷物検査を終えられ、30分前までには搭乗ゲートへおいでください」

キャビン・アテンダントの彼女は搭乗券の「Gate28」と書かれた部分をボールペンで丸く囲み、そのあと「Boarding time」の下に書かれた00:55の部分に何度かアンダーラインを引く。その長方形の紙きりは、確かに紙切れに過ぎないのだけれど、ソフィアにとつては記念すべき大事なチケットだ。どうしてわざわざ印を、それも聞きもしないのに印をつけられなくてはいけないのだろうか？ソフィアは自分の白紙の未来に傷をつけられたように思ったが、おそらくこうゆうものなのだろうと思つて搭乗券と自分のパスポートを受け取る。何事も初めてのことはよくわからない。

「良いご旅行を」キャビン・アテンダントはにっこりと笑う。

スーツケースを預けてしまったソフィアは目についた連なつた椅子のひとつを見つけて座る。ポストンバックからペットボトルの水を取り出し、一口含むと手に持っているパスポートと搭乗券をもう一度見つめる。とにかくこれで、チェックインは済ませてしまった。私がミラノに行くチケットは手に入れ、間もなくこの日本を飛び立とうとしている。

ソフィアは22歳の時に申請して手に入れた日本国パスポートを開いてもう一度見て見る。そこには22歳の時のソフィアの顔写真があり、その下にはアルファベットでいろいろな文字が記載されている。ハーフの場合、日本は二重国籍を認めてないから22歳になるまでにどちらかの国籍を選ばなくてはいけない。ものごころついたときから東京で育つ

たソフィアにとって日本国籍を選んだことはごく自然なことだった。

半分イタリア人の血を持つソフィアはチェックインの時にもしかしたらいろいろとややこしいことを聞かれるかもしれないと思って心配していたが、成田空港は日本が誇る国際空港なのだ。私ひとりのためにいちいち尋問していたら飛行機が飛び遅れてしまう。

ソフィアはペットボトルの水を飲み干し、少し落ち着いてロビーを見渡す。大きなガラス窓の外には街灯を反射したオレンジ色の光が映し出され、ロビー内はまばゆい蛍光灯の光で溢れている。アルファベットが書かれた看板がぶら下がり、カウンターにはそれぞれ番号が並んでいる。ソフィアが見た空港という場所は今まで見たどんな場所とも違って見えた。東京の大きな駅とも違い、この場所にはあまり生活の匂いというものがない。浮浪者もいないし、誰しもが心なしか小奇麗な格好をしている。それはここにある日常というもの飛び越え、国を離れる際に、皆何かしら余分なものを整理してきているからかもしれない。

ソフィアがミラノ行きを決めたのは母が亡くなったその晩のことだった。病院で母が息を引き取った後、ソフィアは悲しんでいる間もないほど次々と事務的な処理に追われることになった。母の遺体が葬儀屋の車で実家に運ばれると聞きつけた親戚たちがすぐにやってきた。数時間前まで母が亡くなることを見守る緊張感を張りつめていたソフィアにとつて、突然自分の家の宗派がどう、焼香の順番がどう、花の名前がどう、棺桶の価格がどう、そんなこと言われてもほとんど上の空だった。

もし母の兄、伯父がその場にいなかったらソフィアと弟シンジでは葬儀の段取りはできなかっただろう。親戚の間で母はイタリアに行つて子供を作り、戻ってきて両親に買ってもらった家に住み、気ままに暮らしている、くらいに思っているようで、ソフィアが覚えている限り親しい交流というものはなかった。

親戚の人々は葬儀のためにお坊さんはどこのお寺から何人、お花の価格と数、棺桶のサイズと質にいたるまで細かいことにいちいち口をはさんだ。ろくに親戚たちと顔もあわせでいなかったソフィアは疲れと腹立たしさで彼らの顔をまともに見ることさえできなかった。世間体ばかりを気にし、体面にこだわる親戚たち。この血族の血が半分流れていると思っただけでこの時ばかりは血を抜き取りたいような気分になった。死んだのは私の母なのだ、お前たちには祈つてほしくない。そう大声で彼らに向かって叫びたい衝動に駆られた。

結局親戚たちをなだめ、葬儀の細かい段取りを決め、その場をまとめてくれたのは60歳に近い伯父だった。小柄な体に、短髪の真つ白な髪、目じりに深い皺を作る人懐っこい笑顔をした伯父のことは親戚で唯一小さいころから慕っていた。伯父は若い頃カメラマンを目指していたらしいが、両親からの融資で高度成長期の時代にカメラの部品を作る会社を立ち上げ一時期は都内に小さなビルを構えていた。バブル崩壊後から会社は傾き始め、それとともに自己破産し、離婚。現在は1人暮らしでいつも古いカメラをいじくっている。

台所兼リビングの向こうにある和室に布団が敷かれ、その中に冷たい母の遺体があった。

親戚たちが帰ってしまった後、伯父はどっしりと畳の上に座り、寝かされた母の遺体を黙って見下ろしていた。気が付くと時間はすでに深夜に差しかかっていた。リビングにあるエアコンから発する風が母の枕元の線香の煙を揺らしていた。シンジはリビングのソファに背中を曲げて腰掛け、葬儀屋が置いていったパンフレットを黙って読んでいた。ソフィアは親戚たちが使ったコップを台所で洗いながら、母と伯父が和室で無言の会話をしているように思えた。遠くから見ると、そこにはようやく家族らしい、死の重みに対する沈黙の層が重なっているように思えた。

ソフィアがコップを洗い終わり、布巾で拭き始めたころ、伯父は喪服のポケットから数珠を取り出し、母の顔に白布を被せると葬儀屋が置いていった祭壇の前に正座した。祭壇では線香が絶えず燃え上がり、花瓶に添えられた花を照らし出すようにろうそくの火がちらちらと揺れていた。叔父は遺体と向き合うとリンを叩いて黙とうを捧げた。済んだ鐘の音が鳴りやむ頃、長い一日を締めくくるかのように鼻から長い溜息のようなものを履きだした。

「人生っていうものは、年齢通り、順番にはいかないもんだ」伯父は畳の上に座ったままそう語りかけた。叔父の背中のはしばらく見ないうちにさらに丸みを帯び、初老にさしかかった哀愁のようなものが肩に降り積もっていた。

「ねえ、ソフィアちゃん、覚えておくといい、人はある別の人を生かそうとするために死ぬ場合もある。恩着せがましいことはいいたくないが、みんなある程度そうやって生きていくんだ。死というものが種になって、そこから新しい芽がでることだってある。ソフィアちゃんはまだ若いんだから、なんでもやってみるといいよ。明日も大変だから、今日はもう帰るよ。線香番をしなくちゃいけないけど、シンジ君と交代で休むんだよ」そう言い残して伯父は帰っていった。叔父が帰ってしまうと線香の煙が充満したリビングでシンジが思い出したように声を出さずに泣き始めた。

ソフィアは母の枕元に座り、顔にかかった白布を持ち上げた。母が亡くなるとすぐに病室で看護婦が死化粧を施してくれた。それまで衰弱するだけの顔を見守ってきたソフィアには母が蘇ったかのように輝いてみえた。まるでさっきまで苦しんでいたことがうそのように事前に用意していた人生最良の仮面を身に着け、新しい生命を吹き込まれたようにその顔は美しく、華やいで見えた。最愛の母が亡くなったという悲しみが湧き上がってくるのと同時に、その美しい最後の顔をこの世に残したひとりの女性として、ソフィアは母に憧れを感じないわけにはいかなかった。頬は死化粧のおかげで赤みを差し、口紅をした唇は濡れてなめらかな放物線を描いていた。

「ソフィアに渡すものがあるんだ」と泣き止んだシンジが言った。「ママが、私が死んだらおねえちゃんに渡してねって」そういってリビングにある箆笥の棚を開けた。

「え、私に？どうゆうこと？」

「俺宛てにも手紙があつてさ、なんていうか、やっぱりロマンチックだったんだよな、ママって」そう言ってソフィアに手紙を差し出した。手紙は「ソフィアへ」と書かれた綺麗

な和紙の封筒に入っていて、手に取ってみると意外なぐらい重く感じられた。まるで抜き出た母親の魂が、その便箋に宿っているかのように。それを読んだソフィアは、その場でミラノへ行くことを決意した。

荷物検査が終わると冷酷な目つきをした、分厚い眼鏡をかけて禿げ上がったおじさんがろくに一瞥もしないままソフィアのパスポートにスタンプを押し、眩い免税店を通り過ぎて番号の案内通りに進むと28番ゲートの看板を見つける。

カウンターの前に並んだ椅子には満席に近い人が座っており、大きな窓ガラスから夜の飛行場が見える。淡いオレンジ色の街灯に照らされた滑走路には翼を広げた飛行機が光を反射しながら静かに佇み、貨物輸送の車が徘徊しているのが見える。

ソフィアは窓際の席に座るとシンジにメッセージを送る。「今からいつてきます(、)そっちも元気だね！」

滑走路を眺めながら、自分が3歳のときに搭乗したであろう記憶を探ってみるが、ソフィアには思い出せない。霧の向こうの景色のようにそこにあるはずの記憶は霞んで見えなくなっている。自分が生まれたところ、と思ってみるがその空気がどんなものなのか、その時の暮らしがどんなものなのか、思い出そうと思ってもそこには全く手ごたえのないものはない。こうして滑走路を目の前にしても、飛行機に乗れば世界中のどんなところへでも行けるという実感もない。ソフィアにとっては飛行機に乗ること自体が大きな冒険と呼んでもいいようなものだ。

「Buon viaggio! (よい旅行を)」とシンジから返信が来る。ケータイを見ると時刻は0:00と表示してある。テイクオフまであと20分、搭乗まではあと30分ほどだ。

次第に緊張と不安が高まるのを感じる。果たして飛行機は無事に飛ぶのだろうか、本当に雲の先には見知らぬ大地が存在するのだろうか。私の生まれた土地にはどんな風が吹いているのだろうか。

ゲートを見回すとそこにいる人の大半が日本人であるように思える。年配のグループの一人には大きな笑い声をあげるおばさんがいて、型遅れのスーツを着てじっと黙っている小柄で表情のないおじさんが含まれ、その脇にはうっすらと作り笑いを浮かべる若い添乗員の女性が座っている。ベビーカーを引いた家族連れがいて、パソコンを膝に抱えたビジネスマン、ケータイから一時も目を離さない神経質そうなOLがいて、その周りを走り回る楽しそうな子供の姉弟が2人いる。5, 6歳ぐらいの姉のほうは「Hello kitty」とキャラクターが胸に書かれたティシャツを着て、それを追いかける弟のほうは「Pokemon」と書かれたティシャツを着ている。

その中均一な光景に色を落とすように、清潔な格好をした白人の老夫婦が寄り添って囁き合い、ドレッドヘアで旅慣れた風貌のラテン系の青年は目を閉じて耳に刺したヘッドフォンに身を委ねている。日本人の中に混じった彼らはどことなく居心地の悪そうに見える、早く別の場所に移りたいようにも見える。

じゃあ、自分はどう見られているんだろう、とソフィアは思う。目の前にいる100人

ほどの人のことなんて私は全然わからない。彼らがどんな人生を生き、そこにはどんな理由があつて、なぜ、今ここにいるのか。団体のグループは社員旅行かもしれなし、そのなかの小柄なおじさんは毎日畑に出ている百姓かもしれず、OLは不倫をしていた恋人と別れて転職前の気晴らし旅行に行くところであり、ビジネスマンは国家の秘密を密告しているスパイで、ティシャツの姉弟は映画撮影のロケに出かけるところで、老夫婦たちは孫に会いに日本に滞在していたかもしれない、ドレッドの青年は新興宗教の教祖かもしれない。そこにはそれぞれのドラマがあり、それに付随した血液が流れているのだろう。しかし彼らが私のことを知らないように、私も彼らのことを知らない。私にも血は流れているが、私は今からその半分を取り戻しにいく、これが私のドラマなのだ。そう思つてソフィアは、霧の向こうの思い出を探すように窓の外を見つめる。

機内に乗り込み自分の席に座るとしばらくして「May I attention please」と機内に放送がかかる。ゆつくりと機体が動き始め、窓側の席に座ったソフィアから見える景色が動いていく。管制塔の明かりが見え、滑走路に埋め込まれた星屑のようなライトの帯が通り過ぎていく。機体の動きはあまりにもゆつくりしているため、本当にこの機体は空に舞い上げられるのだろうかと思う。

ソフィアの隣の席には眼鏡をかけた30代と思われる日本人男性が座っている。ひざ元のポケットに単行本を差し込むとすぐに眠ってしまったようだ。彼はどんなドラマを持っているのだろうかソフィアは思う。私は母を亡くして、今から自分が生まれた土地に行くんです、そう誰かに話してみたくなる気持ちもある。冒険とも呼べるフライトが目の前に迫り、その先に何が待っているのか、ソフィアはそこで暮らす人々と、街の風景のことを思った。3か月、その期間で何か自分がやりたいことを見つけないとソフィアは考えている。そこで自分の血は暖められ、何か別の道筋を示してくれることを願う。

轟音と共に飛行機が加速し、高鳴る風の音と、押さえつけられるような圧力を感じ始める。ソフィアは胸の十字架のペンダントを握り、この母なる土地をしっかりと目に焼き付けようとする。

機体が持ち上がると同時に空港の夜景が見渡せ、夜の街の夜景が目に入ってくる。まるでショパンのピアノ曲のように繊細で、どこか幻想的で、街のネオンのひとつひとつが生活の灯の連続のように儚く響きあっている。空へ向かう風に乗って、ソフィアは地上に広がるひとつひとつの明かりの中に生と死のドラマを探そうとしばらくそんな街を見下ろしている。